

6月8日(日) マルコの福音書5章35～43節

「恐れなくて、ただ信じていなさい。」(36節)

---

長血をわずらっていた女と話している間に、ヤイロの家から「あなたのお嬢さんはなくなりました。」との知らせが入りました。ヤイロがどれほど失望したかについては想像に難くありません。もっと早く来てくれれば、娘は死なずにすんだのにとの思いがあったことでしょう。そして、ヤイロの娘が亡くなったことによって、ヤイロのできることはなくなってしまい、ただ絶望するしかありませんでした。しかしそのような人間の側で万策尽きたと言える状況こそ、神の好機であり、主はその時をじっと待っておられるのです。ヤイロに対してイエス様は「恐れなくて、ただ信じていなさい。」と言われました。自分では、もはや何もすることがない、何もできない状況の中で信仰を求めたのです。私たちに対しても絶望的な状況の中で、イエス様は「ただ信じていなさい。」と、どこまでも信仰を求められます。信じるとは、すべてをゆだね、ただ主の最善を祈り根がしことです。

会堂司の家に着くと、人々が取り乱して、大声で泣いたりわめいたりしているのを見ました。恐らくヤイロと悲しみを分かち合おうとして来た人たちが大勢いたのでしょう。その者たちに対してイエス様は「どうして取り乱したり、泣いたりしているのですか。その子は死んだのではありません。眠っているのです。」と言うと、彼らはイエスをあざ笑いました。それと同様に、私たちの信仰も嘲りの対象となることもあるでしょう。しかし必ずあざ笑う者たちが、イエスのみわざを通して主の栄光を見る時が来ることを信じたいと思います。そして、イエスは子どもの手を取って、「タリタ、クム」と言われると、少女は眠りからさめたように起き上がり、歩き始めました。イエス様は、いのちの源であり、死をも克服される方であることがここで明らかにされました。私たちも、イエス様が再臨される時に、死からよみがえらせられる時がまいります。その私たちにとってもはや死はすべての終わりではなく、一時的な地上での別れを意味するものとされました。十字架の死から三日目によみがえられたイエス様こそが、私たちの初穂となってくださったのです。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」と言われ、死に打ち勝たれたイエス様に心から感謝いたしましょう。

## 6月9日(月) マルコの福音書6章1～6節

「イエスは彼らの不信仰に驚かれた。」(6節)

---

イエスはそこを去って、郷里であるナザレに行かれました。(1節) 安息日にイエスが会堂で教え始められると、人々は驚き、「この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、その手で行われるこのような力あるわざは、いったい何なのだろう。」(2節)と言いました。人々は、イエス様の知恵や力あるわざについては認めましたが、イエスご自身につまずきました。まず、当時は人々が会堂で教える時には、どこのラビに師事して教えを受けたかということが重要でした。しかし大工であったイエス様が、どこかのラビのもとへ行き、教えを願ったとは思えないということで、イエスの教えの権威を彼らは疑ったのでしょうか。それとともに、ナザレの人々はイエス様の出自を問題にしています。まずは、大工と言います。軽蔑とは言わないまでも尊敬すべき対象とは思えなかったということなのでしょう。また人々はヨセフの子ではなく、マリアの子と言います。ヨセフがこの時点で亡くなっていたか、もしかするともっと早くにヨセフが亡くなり、イエス様は母子家庭で育った可能性もあり、中にはイエス様を婚外子として見ていた人たちがいたかもしれません。ある人は、ナザレの人々の反応は、イエス様が神の子としてではなく、まさにまことの人として郷里で過ごされたことの証しなので、それゆえにイエス様を救い主であるとか神の御子とは信じることができなかつたと言いますが、むしろ6節で「イエス様は彼らの不信仰に驚かれた」ことに注目すべきです。つまり、ナザレの人々のイエス様に対する反応は不信仰から出ていたということです。つまり、イエス様が大工だったことや、マリアの子であるとか家族も自分たちとともにいるとか、そのようなことは単なる言い訳に過ぎず、ナザレの人々はただイエス様を受け入れたくなかつたということなのでしょう。ここに私たちは人の心の頑なさを見ます。つまり人は、信仰を受け入れたくないと思えば、どんなことでも言い訳にして否定するということです。そのような不信仰な心の前では、何も力あるみわざを行うことができませんでした。そのような頑なな心が主によって変えられるよう、私たちも主を拒む者たちのために祈りましょう。

6月10日（火）マルコの福音書6章1～6節

「それを聞いた多くの人々は驚いて言った。「この人は、こういうことをどこから得たのだろう。この人に与えられた知恵や、その手で行われるこのような力あるわざは、いったい何なのだろう。」

---

昨日と同じ箇所から今日も学ばせていただきたいと思いますが、ここで気がつかされますことは、安息日になってイエス様が会堂に入って、教え始められた、つまりみことばを語られた時に、ナザレの人々は「この人は、こういうことをどこから得たのだろう。この人に与えられた知恵や、その手で行われるこのような力あるわざは、いったい何なのだろう。」という反応をしたわけです。つまり、教えそのものを受け入れなかったということであり、仮にイエス様に対する偏見はあったとしても、もしイエス様の教えを素直に聞く気持ちがあれば、そこからイエス様に対する信仰が芽生えたはずです。「預言者が敬われないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」というのも、神から遣わされた預言者が語ることを様々なことを理由にして受け入れようとしないことをイエス様ご自身が嘆いておられるとも言えます。イエス様は、ご自分も郷里であるナザレに来られて、そこに住む人々にまさに恵みが与えられようとしていたにもかかわらず、彼らはイエス様につまずき、その恵みを十分に受け取ることができなかったのです。私たちも、さまざまなかたちで主がみことばを通して語ってくださいます。それに対して私たちはさまざまな言い訳をしたり、聞く耳を持たないことによってみことばに応答することを拒むことで、みことばからの恵みを受け取り損ねてしまっていることはないでしょうか。そのようなところにも私たちの不信仰が現れることにより、イエス様が私たちの不信仰を見て驚かれ、嘆かれるということはないでしょうか。

6月11日（水）マルコの福音書6章7～13節

「こうして十二人は出て行って、人々が悔い改めるように宣べ伝え、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒やした。」

---

イエス様は、十二弟子を呼び、二人ずつ遣わし始めました。その旅に際して、まずイエス様は、汚れた霊を制する権威をお授けになり、旅のためには、杖一本のほか何も持たないように、パンも、袋も、胴巻きの小銭も持って行かないように、履き物ははくように、しかし下着は二枚着ないように命じられました。つまり、まずは汚れた霊を制する権威など、必要なものはイエス様が予め備えてくださり、そして最低限度のものをもって遣わされることで、十二弟子は、神にのみ頼ることを通して、神の守りと満たしを経験することが、ここでは必要であったということなのでしょう。もちろん、何か人間的な備えをするようでは主に従うことはできないなどと言うつもりはありませんが、むしろ、神にのみ頼る信仰があるかどうかというところで、私たちの信仰が問われていると言えます。

それとともに、10節で「どこでも一軒の家に入ったら、その土地から出ていくまでは、その家にとどまりなさい。」と言われました。ここでのイエス様の意図は、一軒の家をその土地を回る時の拠点としなさいということです。つまり、その人たちを通して神が働き、その一軒の家を通して主が必要を満たしてくださることを信じなさいということです。もし弟子たちがあちらこちらの家を回るようになりますと、弟子たちを招こうとそれぞれの家で競争が始まったり、逆に弟子たちも待遇の善し悪しでとどまる家を決めたりしかねないからです。また11節では「あなたがたを受け入れず、あなたがたの言うことを聞かない場所があるなら、そこから出て行くときに、彼らに対する証言として、足の裏のちりを払い落としなさい」と言われました。これは、神がご自身のみこころと権威をもって、すべてを正しくさばかれる時があるので、その神のさばきにゆだねますとの証しの意味があります。私たちも、宣教は私たちのすべきことですが、その福音のメッセージを受け入れるか拒むかは、受け取った人々の責任となり、私たちはそこまで責任を持つ必要はありません。それでも多くの人が福音を信じて受け入れるように祈ってまいりましょう。

私たちに期待されていることは、ただ神にのみ信頼して、行くようにと言われたところに遣わされ、そこで主の証し人として与えられた務めをただ忠実に果していくことだけです。主は、必要な助けを与え、守り、導き、主によって務めを果すことができるようにさせてくださいます。主を信じて一歩踏み出しましょう。

6月12日（木）マルコの福音書6章14～20節

「それは、ヨハネが正しい聖なる人だと知っていたヘロデが、彼を恐れて保護し、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていたからである。」（20節）

---

ガリラヤを中心としてイエス様と弟子たちは神の国の福音を宣べ伝えました。その方法は、「人々が悔い改めるように宣べ伝え」（12節）「多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒」（13節）すというものでした。その中でイエスの名が知れ渡り、人々の間で議論されたことは、イエスが誰かということでした。バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったとか、エリヤだとか、昔の預言者のような預言者の一人だと言われたりしました。そして、ヘロデ自身は「私が首をはねた、あのヨハネがよみがったのだ」と言いました。ヘロデがヨハネの首をはねた理由は、ヨハネが「あなたが兄弟の妻を自分のものとするのは、律法にかなっていない」と言い続けたからです。一見しますと、ヘロデの問題は男女間の情事のように思えますが、どうやらそうではなかったようです。ヘロデ・アンティパスの兄弟フィリッポが、父ヘロデ大王から譲り受けたヨルダン東岸やガリラヤ北部を領地として持っていました。しかし、そこはパルティア帝国との国境にあたり、すでに何度も侵入されることで領有権の危機に瀕していました。それゆえヘロディアは自分と自分の娘の身を案じて、夫フィリッポのもとを去り、義兄弟であったヘロデ・アンティパスのもとに身を寄せたのです。そうなりますと自分たちの身の安全を考えて義兄弟のもとに行ったのは仕方のないことだったのではと何となく私たちのヘロディアに対する見方も変わるかもしれません。しかし、それに対してバプテスマのヨハネは、レビ記20章21節を根拠に「あなたが兄弟の妻を自分のものにすることは、律法にかなっていない」と言い続けたのです。（18節）神の律法に決して妥協しないヨハネの姿勢がここに現れています。ですから、19節でヘロディアがヨハネを恨み、彼を殺したいと思ったのは、自分は間違っただけをしていない、これは仕方のないことだと思ったことを批判されたからなのでしょう。私たちも、自分が間違っただけをしていないと思っているにもかかわらず人から非難されると謙遜になることは難しいことです。しかし、自分は人や社会に対してだけではなく、主の御前に間違っていないかみことばによって自己吟味をする謙虚さを与えられたいと願います。そしてヘロデも、ヨハネが正しい聖なる人だと知り、彼を恐れて保護し、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていました。（20節）しかし、ヨハネを通してヘロデに神様が求めていたことは、そのようなことではなく、悔い改めて、神の律法に従うことでした。私たちも、聖書のことばに喜んで耳を傾けても決して悔い改めようとしない人がいます。聖書のことばを通して自分の罪や過ちを示されたなら、言い訳せずそれを悔い改める信仰者でありたいと思わされます。

6月13日（金）マルコの福音書6章21～29節

「王は非常に心を痛めたが、自分が誓ったことであり、列席の人たちの手前もあって、少女の願いを退けたくなかった。」（26節）

---

21節「良い機会が訪れた」とは、ヨハネを恨み、彼を殺したいと思っていたヘロディアにとっての良い機会です。ヘロデの誕生日に祝宴が設けられ、ヘロディアの娘が、入って来て踊りを踊り、ヘロデや列席の人々を喜ばせました。そこでヘロデは、「何でも欲しい物を求めなさい。おまえにあげよう。」「おまえが願う物なら、わたしの国の半分でも与えよう。」とまで言います。そして母親の願ったとおりにバプテスマのヨハネの首を求め、その願いどおりにバプテスマのヨハネの首が少女を通して母親に渡され、ヘロディアはヨハネを殺したいとの思いを遂げることができたのです。26節で王が非常に心を痛めた理由は、ヨハネが正しい聖なる人だと知り、彼の教えに喜んで耳を傾けていたからです。しかし、ここでヘロデ・アンティパスは、二つの間違いを犯しています。一つは、本来であればヘロデ自身が自らの権威をもって家族を治めるべきでした。つまり。ヘロディアと彼女の娘に対して、ヨハネを恨むことは筋違いであると諭し、どんなことをしてでもヨハネを守るべきでした。二つ目が、「自分が誓ったことであり、列席の人たちの手前もあって」とありますが、もしここでヘロディアの娘に誓ったことを反故にすれば、ヘロデ自身の評判に関わり、彼の王としての権威も失墜したことでしょう。恐らく彼はそのことを気にしたのだらうと思います。私たちも、日々の生活の中で、自分の評判や面子を気にして言わなければならないことが言えなかつたりすることはないでしょうか。結局神ではなく人を恐れる傾向が私たちにはあります。どんな時にも人を恐れず、神の義とみこころを行う信仰者でありたいと思わされます。

6月14日（土）マルコの福音書6章30，31節

「さて、使徒たちはイエスのもとに集まり、自分たちがしたこと、教えたことを、残らずイエスに報告した。」（30節）

---

使徒たちとは、イエスによって遣わされた十二人の弟子たちのことです。7～13節にありますように、神の国の福音を宣べ伝えるために遣わされた十二弟子たちが帰って来て、イエスのもとに集まり、自分たちがしたこと、教えたことを、残らずイエスに報告しました。私たちも、祈りを通してイエス様に一日の出来事を報告し、感謝をもって一日を終えることができることは本当に幸いです。それとともに私たちは集まったなら、どんなことを話しているのでしょうか。もちろん世間話をしてはいけないとは言いません。しかし、私たちの交わりの中心には生ける主イエス様がおられます。そのことを決して忘れず、イエス様を中心とする幸いな交わりとなることを願います。そして、十二弟子たちは自分の仲間たちが報告するのを聞いて、時にはねたみ心が出て来たり、自分よりも大きな働きをしている人の報告を聞けば面白くない思いにさせられることもあったかもしれません。教会の交わりは本当に幸いです。罪人の集まりでもあります。口にしなくてもさまたげな思いをもって、一人一人がそこにいることでしょうか。しかし喜んで兄弟姉妹の証しを聞くことができるようにイエス様に心を守っていただくことも必要です。それとともに、話す時には周りの兄弟姉妹への配慮も忘れないようにしたいものです。

イエス様は、宣教旅行から帰って来た弟子たちに「さあ、あなたがただけで、寂しいところへ行って、しばらく休みなさい。」と言われました。ここにイエス様の弟子たちに対する配慮を見ることができます。そして休むことも主のみこころであり、特に人を避けて自分たちだけで休むことをイエス様が命じておられることを思わされます。私も、なかなか休めないと思うこともありますが、イエス様が休みなさいと命じておられることをおぼえ、また良い奉仕を続けるために、なるべく休みをきちんと取るようにしなければと思わされています。